様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：13901
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2010
課題番号：20520222
研究課題名（和文）
エズラ・パウンドの儒教受容とファシズム――「表意文字的手法」の末路
研究課題名（英文）
Ezra Pound’s Reception of Confucianism and Fascism: The Fate of “Ideogrammic Method”
研究代表者：
長畑　明利（NAGAHATA, Akitoshi）
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授
研究者番号：90208041

研究成果の概要（和文）：1930 年代以後、儒教書の翻訳や評論の執筆により、現代西洋社会に儒教的な秩序と道徳の復活を促したアメリカのモダニスト詩人エズラ・パウンドの主として 30 年代後半のテクストを分析することで、その儒教受容が同時期に顕著になる彼のムッソリーニおよびファシズム支持と連動することを明らかにした。また、初期の『詩篇』を特徴づけた革新的詩法「表意文字的手法」が、儒教及びファシズムへの傾倒に伴い後退する過程を検証した。

研究成果の概要（英文）：The main task of this study was an analysis of texts written primarily in the late 1930s by Ezra Pound, an American Modernist poet who translated Confucian classics and wrote various essays on Confucianism in which he argued that the West should regain social order and morality by learning from it. The study has shown that his reception of Confucianism was linked with his support for Mussolini and the Italian Fascism, becoming manifest in the same period when he studied and advocated Confucianism. It has also shown how Pound’s “Ideogrammic Method,” his innovative poetic style characterizing his early Cantos, was lost or weakened, as he devoted himself to Confucianism and Fascism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：パウンド・儒教・ファシズム・表意文字的手法

１．研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで、20 世紀前半に活躍したアメリカのモダニズム詩人と「抽象」の関係を検証する研究を進めてきた。2005 年度までに、Gertrude Stein、Wallace Stevens、Hart Crane、T. S. Eliot に見られる抽象観について考察し、2006～07 年度には、Ezra Pound の能体験が彼の「漢字的抽象」の発展型である「表意文字的手法」の生成に果たした役割について研究を行った。本研究は、これらの研究――とりわけ、パウンドの抽象観及びそれに基づく文体実験における東洋文化の影響に関する研究――をさらに発展させるものとして構想された。

(2) 本研究が対象とした主たる問題領域は次の通りである。

①パウンドの儒教受容

1915年に Fenollosa による中国詩の訳稿をもとに詩集 *Cathay* を出版して以来、パウンドの中国への関心は次第に顕著なものに

なっていったが、1930年代以後、彼はさらに孔子および儒教への傾倒を強めていった。パウンドは35年には『論語』を翻訳し、37年には "Immediate Need of Confucius" を、38年には "Mencius" を発表し、また、同じく38年に出版された *Guide to Kulture* にも『論語』の抜粋を掲載して、現代西洋社会に儒教的秩序と道徳の復活を促した。パウンドはさらに、*The Cantos* の新作として40年に発表された *Cantos LII-LXXI* に、朱熹の『資治通鑑綱目』に基づく仏訳を利用した「中国詩篇」を収録し、その後、『大学』、『中庸』の翻訳も行った。戦後の 55年には『詩篇』の新作 *"Section: Rock-Drill"* で『詩経』を、59年の *"The Thrones"* で清時代の儒教的処世訓『聖諭廣訓』を、それぞれのモチーフの一部として採りあげてもいる。欲と腐敗にまみれた社会に儒教的理想を実現する意義を訴えたパウンドは、現代を生きた儒者とすら見なしうる。

②パウンドのファシズム支持

しかし、パウンドのこうした儒教への傾倒は、彼のムッソリーニおよびファシズムへの傾倒と時期を同じくする。パウンドは 1920年代後半にはムッソリーニ支持者となり、33年には彼と短時間の面談を果たした。36年には *Jefferson/Mussolini* を発表してムッソリーニを称揚し、39年にはアメリカの第２次大戦参戦を断念させるべく上院議員の説得を試みた。41年からはローマ発のラジオ放送でファシズムに対抗するアメリカ軍を弾劾し、44年にはイタリア語によるファシズム兵士のための戦意高揚詩 "Canto 73" を執筆した。45年のピサ幽閉、反逆罪裁判の後、セント・エリザベス病院軟禁中に発表された *Pisan Cantos* でも、彼は殺害されたムッソリーニへの挽歌を綴っている。

③パウンドの詩作スタイルの変化

一方、パウンドは、フェノロサの漢字論に喚起されて「漢字的抽象」の概念を編み出し、これを「表意文字的手法」（Ideogrammic Method）の詩法に発展させてきた。異質なテクストの断片を併置させるこの手法は、コラージュ性の高い初期の『詩篇』の主要な創作原理として用いられた。しかし、多様性を志向するこのコラージュの要素は、1930 年代後半の「中国詩篇」を一つの契機として後退し、代わりに、原典の要約を旨とする reading-through のスタイルが顕著となる。30 年代のパウンドに見られる＜異質なものの共存から単一なるものへの集中へ＞というこの文体上の変化は、パウンドの儒教及びファシズムへの傾倒と同時期に生じたものであり、両者には関連性を認めざるを得ない。

(3) パウンドの儒教への傾倒とムッソリーニおよびファシズム支持の関係について、欧米圏を中心とする研究者たちは、これまで、両者の関連性を認めつつも、より深い議論を展開してこなかった。とりわけ、1930 年代以降に発表された中国史を題材とする一連の詩篇に見られるパウンドの儒教理解と、ファシズムを擁護する彼の政治的発言との関係が深く掘り下げられることはなかった。パウンドの儒教受容を論じた Feng Lan, *Ezra Pound and the Confucianism* (2005) や、「中国詩篇」論を収録する Jean=Michell Rabate, *Language, Sexuality and Idealogy in Ezra Pound's Cantos* (1986) 、Steven G. Yao, *Translation and the Language of Modernism* (2002) など比較的新しい研究も、依然、パウンドの儒教受容とファシズム関与との関係を十分に論じるものではない。一方、Robert Casillo, *The Genealogy of Demons: Anti-Semitism, Fascism, and the Myths of Ezra Pound* (1988) や Tim Redman, *Ezra Pound and Italian Fascism* (1991) などパウンドのファシズム関与を扱う先行研究は数多いが、これらはパウンドの儒教受容との関係を重視するものとは言いがたい。

２．研究の目的

(1) 上述の問題領域を研究対象とする本研究の主たる目的は次の２点、すなわち、①パウンドの儒教への傾倒とファシズム支持の連動性を明らかにすること、②パウンドの革新的詩法「表意文字的手法」が、儒教及びファシズムへの傾倒に伴い、後退する様を検証することである。

(2) より広い見地に立てば、本研究は付随的に、次の２点の目的を持つものでもある―①欧米文化圏で展開された革新芸術運動であるモダニズム文学の担い手であるパウンドが東洋（中国）文化から受けた影響の一端を明らかにすること、②アメリカのモダニズム文学一般に窺われる革新的表現方法および「抽象」概念に対する同時代的関心を位置づけることである。すなわち本研究は、異文化が独創的な文学的革新の変化に果たす役割を明らかにし、また、アメリカのモダニズム詩の一つの特徴である「抽象」への関心がいかなる政治的意味を担うに至るかを明らかにする研究への貢献を目指したものである。

３．研究の方法

(1) 本研究は主として文献調査により遂行した。具体的には、①孔子もしくは儒教への言及の見られる、主として 1930 年代以後のパウンドの詩作品、散文、書簡、翻訳及びその解説を対象に文献調査を行い、それらに見出されるムッソリーニ及びファシズムへの直接・間接の言及を分析し、両者の関係を検討すること、②この時期の詩作品に見られるパウンドの詩のスタイルの変化を分析し、その変化と彼の儒教及びファシズムへの傾倒と

の関係を明らかにすること、が本研究の研究方法である。
(2) 文献調査において利用した主たる文献は、①1940 年に発表された『詩篇』の新作 *Cantos LII-LXXI* 収録の「中国詩篇」、②「中国詩篇」が依拠した *L'Histoire Generale de la Chine ou Annales de cet Empire: Traduites du Tong-Kien-Kang-Mou*（Joseph-Anne Marie de Moyriac de Mailla による朱熹の『資治通鑑綱目』のモンゴル語版からの翻訳、全 13 巻、1777-1785）、③1930 年代後半にパウンドが出版した雑誌寄稿文（*Ezra Pound's Poetry and Prose: Contributions to Periodicals* [Ed. Lea Baechler, A. Walton Litz and James Longenbach、全 10 巻、1991] 収録）、④パウンドの *The Japan Times* 寄稿文および日本の詩人北園克衛らとの書簡（*American Poetry and Japanese Culture* [Sanehide Kodama, ed., 1984] 所収）である。
(3) 文献調査に加え、パウンドの「表意文字的手法」に見られる言語と視覚性の問題についての知見を得るために、2008 年にサンフランシスコ近代美術館にて調査を行った。

４．研究成果
(1) 研究の結果、パウンドの儒教への傾倒とファシズム支持の連動性に関してはあらたに次の知見を得た。
①「中国詩篇」にはムッソリーニおよびファシズム政権の思想・政策を反映する事例があること。例えば、そこで辿られる神話時代から清までの中国の歴史に見られる「易姓革命」の視点や農民蜂起の記述は第１次大戦後のイタリアにおけるムッソリーニの台頭を強く意識させるものとなっている。元のクビライ、清の雍正帝の農業政策への言及にはファシズム政権の農業政策で用いられたイタリア語（Ammassi）が使用されている、などの諸例を挙げることができる。このことについては、今後論文にまとめ、発表する計画である。
②「詩篇 59～61」においては、明から清にかけてのイエズス会宣教師の中国布教が扱われ、そこには西洋と中国、カトリックと儒教の対立の構図が浮かび上がる。この対立についてパウンドは詩テクストにおいては明確な態度を示していないものの、同時期に発表された評論 "On the Degrees of Honesty in Various Occidental Religions" には、パウンドの痛烈な西洋・カトリック批判と儒教擁護の姿勢が窺われ、また、そこでは儒教への傾倒が彼のファシズム支持と連動するものであることが示されている。このことについては、以下の［雑誌論文］欄 1）および［学会発表］欄 4）で発表した。
(2) パウンドの『詩篇』におけるスタイルの変化については、初期の『詩篇』に見られるコラージュ性の強いスタイル（「表意文字的手法」）が「中国詩篇」においては希薄になる、つまり、個々の詩篇を構成する断片の引用元が de Mailla の中国史にほぼ限定され、また、その引用も年代順になされているため、これらの詩篇にはテクスト上の多様性が失われたことを確認した。パウンドは単一のソース・テクストを利用する場合も、そこからの引用は断片的になされるため、個別の詩篇に統一感はないが、「中国詩篇」においてソース・テクストが朱熹の『資治通鑑綱目』に基づく de Mailla の中国史にほぼ限定されることは、その詩篇の政治・思想的傾向がまさにソース・テクストのそれに従属的であることを示唆している。初期の詩篇の「表意文字的手法」の多様性に見ることのできた、異質なものの共存の可能性は、こうした単一のソース・テクストに拠る詩篇においては失われた、もしくは、希薄になったと考えることができ、このスタイル上の変化は彼の政治・思想的傾向と連動するものであると考えられる。このことについては、今後さらに検討を加え、論文等の形で公表する計画である。
(3) これらの知見に加え、「中国詩篇」および同時期のパウンドの著作に関して、新たに次の知見を得た。
①「詩篇 60」および「詩篇 61」は、清の康熙帝と雍正帝の治世を扱うが、そこには康熙帝によって廃太子とされた皇太子（康熙帝の第２子）への言及があり、康熙帝の後を継いだ雍正帝との扱いと比較することで、儒教の徳の一つである「孝」についてのパウンドの態度を見ることができる。このことについては、以下の［学会発表］欄 2）において発表した。
②「詩篇 60」には陳昂という名の総兵による皇帝への嘆願書からの抜粋が含まれているが、このくだりは、西洋・カトリックの中国進出に対する抵抗の意味を担うものであり、パウンドの西洋文明批判を表すものと考えられる。このことについては、上記 (1)②の研究成果と併せて、[雑誌論文] 欄 1）および [学会発表] 欄 4）で発表した。
③1930 年代末のパウンドの政治的見解を明らかにするために行った、彼の *The Japan Times* 寄稿文および北園克衛との書簡についての検討からは、パウンドのフェノロサ草稿翻訳に対する回顧と、彼の翻訳についての見解（原語主義）が窺える。このことについては、以下の［雑誌論文］欄 3）において発表した。
(4)『詩篇』については Carroll F. Terrell による詳細な註が刊行されているが、「中国詩篇」についての註はいまだ十分なものとは言えない。本研究を通じて、そのうちの数篇を翻訳し、注解を加えた。そのうち「詩篇 60」

の訳および註は下記の［雑誌論文］欄 2）として発表した。
(5) 本研究により、パウンドの儒教への傾倒とファシズム支持の連動性を明らかにし、パウンドの革新的詩法「表意文字的手法」が、儒教及びファシズムへの傾倒に伴い、後退する様を検証するという本研究の２点の主要目的は達成したと考える。今後は、本研究の成果をさらに、論文・口頭発表の形で発表し、また、「中国詩篇」の訳・注を進めていく計画である。また、パウンドのファシズム支持については、彼の経済論についての検討が不可欠である。経済について書かれたパウンドの文章を分析し、彼の経済論とファシズム支持および儒教への傾倒の関係を、また、その経済論と彼の創作理念との関連性を明らかにすることが、次なるパウンド研究の課題である。それにより、アメリカのモダニズム詩人と革新的表現方法および「抽象」についての研究をさらに進展させる計画である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 6 件）
1) 長畑明利（尚**晓进**訳）、「**陈昴与耶稣会**：《**诗**章》59 至 61 章中的**冲突与儒学**」、*English and American Literary Studies* 14 (Spring)、ページ未定、2011、査読なし。
2) 長畑明利、「『詩篇』第 60 篇」[訳・註]、*Ezra Pound Review* 12、43-57、2010、査読あり。
3) 長畑明利、「エズラ・パウンドの「原語主義」――*The Japan Times* 寄稿記事に見るフェノロサ草稿の発展」、『言語文化研究叢書』、pp. 1-18、2010、査読なし。
4) 長畑明利、「白人らしさと黒人らしさ――雑誌 *Fire!!* とモダニズム」、『言語文化論集』32.1、pp. 97-126、2010、査読なし。
5) 長畑明利、「はるか彼方の土地から先祖たちが呼ぶ声――エスニシティの抑圧と顕現」、『現代思想（2010 年５月臨時増刊号）総特集=ボブ・ディラン』38.6、pp. 115-123、2010、査読なし。
6) NAGAHATA, Akitoshi, "Pound's Reception of Noh Reconsidered: The Image and the Voice", *Ezra Pound, Language and Persona* [*Quaderni di Palazzo Serra* 15], pp. 113-125, 2008、査読あり。

〔学会発表〕（計 6 件）
1) 長畑明利、「エズラ・パウンドは何をやっていたのか？――「詩篇 60」を通じて考える」、神戸市外国語大学外国学研究所 2010 年度研究班「もう一つのモダニズム――1920 年代、30 年代のアメリカ女性詩人」３月定例研究会、2011 年３月 19 日、UNITY（神戸）。
2) NAGAHATA, Akitoshi, "An Idea of Order in the Confucian Ethics: The Father-Sun Relationship in Pound's 'Chinese History Cantos'", 3rd International Conference "Modernism and the Orient", 2010 年６月９日、三台山荘（杭州）。
3) NAGAHATA, Akitoshi, "Errors, Translation and Situatedness in the Poetry of Theresa Hak kyong Cha, Yoko Tawada and Araki Yasusada", Modern Language Association, 2009 年 12 月 28 日、Lowes Philadelphia Hotel（フィラデルフィア）。
4) NAGAHATA, Akitoshi, "Chen Mao and the Jesuits: Conflict and Confucianism in 'Canto 60'", The 23rd International Ezra Pound Conference, 2009 年７月２日、Centro Studi Americani (ローマ)。
5) 長畑明利、「オールド・ニグロとニュー・ニグロ――黒人の地位向上と教養主義」シンポジウム「欧米の市民社会の諸相」、2009 年１月 16 日、名古屋大学。
6) 長畑明利、「How White Was It?――ハイ・モダニズムと黒人詩人」、シンポジウム「How Was It Black?――モダニズム再考」、日本アメリカ文学会全国大会、2008 年 10 月 12 日、西南学院大学。

〔その他〕
ホームページ等
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/pound/review/EPR12.pdf
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/sosho/9/nagahata.pdf
http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/32-1/nagahata.pdf
http://www.disclic.unige.it/pub/15/06.pdf

６．研究組織
(1) 研究代表者
長畑 明利（NAGAHATA, Akitoshi）
名古屋大学・国際言語文化研究科・
教授
研究者番号：90208041